

ヨハネによる福音書3章22-36節 「キリストの栄え、証人の衰え」

1A 二つのバプテスマ 22-24

2A 衰える証人 25-30

1B 熱心からくる妬み 25-26

2B キリストを証しする者 27-30

3A 神の遣わした方 31-36

1B 天からの方 31-33

2B 御父に愛された方 34-36

本文

ヨハネによる福音書 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ 3 章の 21 節まで来ました。今朝は、22 節から最後まで、一節ずつ見ていきたいと思います。前回は、ニコデモがエルサレムで、しるしを行っているところにニコデモがやってきました。そしてイエス様が、新しく生まれること、神の御霊によって生まれることの必要性を話されました。それは、イエスの名を信じることによって与えられ、信じる者はみな滅びることなく、永遠の命が与えられるということです。

そして 3 章後半は、1 章に出てきた、キリストが来られたことを先に神に遣わされて証言していた預言者、バプテスマのヨハネが出てきます。彼が、自分の弟子たちに対して言った有名な言葉があります、それが「3:30 あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」です。イエス様が来られたのですから、この方が盛んになり、イエス様を伝えている者自身は衰えなければいけないというものです。

私たちキリスト者が、証しを聞くことはとても恵まれますね。私たちは、アメリカで宣教大会に出席しましたが、今回は、世界の宣教地で長年、主に仕えていた人々が、その証しを分かち合うものでした。そこから見えてくる、イエス様のお姿があります。ところが、教会には、むしろ主のお姿を見えなくさせるということがあります。それは、主の道具にしかすぎない者たちを比較したり、評価したりすることです。説教が良かったか悪かったかという比較、賛美はどうであったか。あの人はこうで、この人はああだということ。コリントにある教会がその過ちに陥っていました。私はペテロにつく、私はパウロにつく、そして最もひどいのは、私はキリストにつく、というような仲間割れをしていました（I コリント 1）。バプテスマのヨハネから、私たちは主を証しすることについて、大切な知恵を得ることができます。

1A 二つのバプテスマ 22-24

22 その後、イエスは弟子たちとユダヤの地に行き、彼らとともにそこに滞在して、バプテスマを授

けておられた。23 一方ヨハネも、サリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた。そこには水が豊かにあったからである。人々はやって来て、バプテスマを受けていた。24 ヨハネは、まだ投獄されていなかった。

イエス様と弟子たちは、エルサレムにいました。場所をそこから移します。ユダヤの地ですが、おそらくはユダの荒野のほうに向かっています。そこにヨルダン川があり、東岸には、ヨハネがかつてバプテスマを授けていたベタニアがあります。その地域にイエス様の一行が行き、そこでバプテスマを授けていました。4 章 2 節を見ると、実際に授けていたのはイエス様ではなく弟子たちであったとありますが、いずれにしても、イエス様に与えられていた権威の中で、バプテスマを授けていました。

バプテスマのヨハネ自身は、「サリムに近いアイノンでバプテスマを授けていた」とありますが、ガリラヤ湖と死海の間辺り、シェケムの東 5 キロ辺りであったのだろつとされています。サリムとは、「平和」のシャロームから派生し、アイノンは泉を意味しています。なので、「そこには水が豊かにあったから」とあります。バプテスマを授ける時に、教会では、全身浸かる浸礼なのか、わずかな水を頭に振りかけるなどする滴礼なのか、意見が分かれていますが、私は、バプテスマの元々の意味は「浸す」というものだし、当時のユダヤ人たちは全身、水に浸かるようにしていたので、基本は浸礼ですね。

ところで、なぜイエス様は弟子たちとバプテスマを授けておられたのでしょうか？そのバプテスマは、どんな意味を持っていたのでしょうか？イエス様は、ここでご自身の名によるバプテスマを授けていたよりも、ヨハネと同じ悔い改めのバプテスマを授けていたのだと思われます。ヨハネは、主が来られるにあたって、その用意をするための悔い改めを、全身水に浸かることによって表明します。なぜそう言えるか？と言いますと、イエス様は注意深く、ご自身がヨハネの宣教の連続で来ていることを示しておられたからです。ヨハネは、「悔い改めなさい、神の国が近づいたから。」と宣べ伝えていましたが、イエス様も全く同じ言葉を持って宣教を始めました。そして、十字架につけられる最後の週、神殿の境内で、宗教指導者から、何の権威によってこれらのことをするのかと問いただされた時に、バプテスマのヨハネは、天からのものか、それとも人からのものか？と逆に尋ねています。ヨハネの宣教が神からのものであると認めたら、自ずとイエス様の宣教も認めざるをえないからです。イエス様が、ヨハネの宣教の延長で来られたことは、イザヤ書やマラキ書に、「道備えをする者が来る」という預言があり、これによって、初めてキリストが来られることが証明されるのであり、それでイエス様は、ヨハネのしていることを初期はそのまま踏襲しておられます。

そして「ヨハネは、まだ投獄されていなかった。」とありますが、他の福音書は、ヨハネがヘロデに捕えられた後に、ガリラヤに行き、福音を宣べ伝えることが書かれていますが、実はその前に、ここに見られるような移行期があったのだということを、他の福音書よりもずっと後に書いた使徒ヨ

ハネは、書き記したのでしょう。バプテスマのヨハネがいなくなったから、イエス様が急に宣教を開始されたのではないということでしょう。世の中においても移行期はありますね、会社での引継ぎとか。そして、神の働きにおいても移行期があります。これから受け継ぐ人も働きをしながら、その働きを受け継ぐ人たちもその働きをすでに開始するということはよくあります。例えば、カルバリーチャペル・コスタメサでは、牧者チャック・スミスが晩年、説教する回数が、体力が弱まっていたために減っていきましたが、その抜けた部分をブライアン・ブローダソン牧師が行っていました。

2A 衰える証人 25-30

1B 熱心からくる妬み 25-26

25 ところで、ヨハネの弟子の何人かが、あるユダヤ人ときよめについて論争をした。26 彼らはヨハネのところに来て言った。「先生。ヨルダンの川向こうで先生と一緒にいて、先生が証しされたあの方が、なんと、バプテスマを授けておられます。そして、皆があの方のほうに行っています。」

ヨハネの弟子たちとありますが、1 章では、アンデレもその一人で、イエス様会遇到、イエス様のほうに弟子入りした話がかかれていす。けれども、ヨハネのほうに留まっている弟子たちもいたことがわかります。「清め」についての論争を弟子たちが、あるユダヤ人としたということですが、当時、ユダヤ教にはエッセネ派がバプテスマを行っていました。パリサイ派が、洗いの清めについての儀式を守っていました。その上、なぜヨハネのバプテスマが必要なのか？ 今や、イエスもバプテスマを授けているではないか？ という内容の議論だったのでしょうか？ ヨハネのバプテスマの価値が相対的に薄れてきたのではないか？ と思われす。

それで、弟子たちはヨハネを思ふ熱心から、妬みにかられたのです。「先生。」と呼んでいす。ラビという意味ですが、ヨハネは預言者であっても、ユダヤ教の教師としては似つかないものがあります。けれども、非常に尊敬していたのでそう呼んだのです。そして、「先生が証しされたあの方」として、イエス様の名前をあえて言及せずにいるところは、かなり牽制している感じに見えます。彼らの不満は、イエスが先生と同じようにバプテスマを授けているということ。同じことをしているということ。それから、自分たちからイエスのほうに行ってしまう、ということす。

主に用いられている器が、主のしもべが、比較や競争の対象にされることがしばしばあります。聖書に登場する人物にもいす。イスラエルが荒野の旅をしている時に、不平を鳴らしていたので、モーセがもう担いきれないと神に愚痴をこぼしたことがありました。それで主は、イスラエルの長老七十人を選び、彼らにモーセに与えられていた御霊の一部を分け与えるようにされました。七十人を会見の天幕のところに集めさせたところ、彼らに霊がくだり、預言をしました。ところが、まだ宿営に残っていた二人がいて、宿営で彼らは預言していたのです。それで、こう書いてあります。「民数 11:28 若い時ときからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは答えて言った。『わが主、モーセよ。彼らをやめさせてください。』」けれどもモーセは答えました。「11:29 あなたは私のためを思

って、ねたみを起こしているのか。【主】の民がみな、預言者となり、【主】が彼らの上にご自分の霊を与えられるとよいのに。」

私たちが、神の恵みを受けるとき、しばしばその器を必要以上に守り、それゆえ神の大いなる恵とその豊かさを、できもしないのに制限してしまおうとすることがあります。それは主に妬みによって制限してしまいます。ユダヤ人指導者らが、イエス様の宣教の働きをやめさせ、この方を十字架にまで至らせたのは、他でもない妬みによるものでした。パウロはこれを、肉の行いとし、コリントにいる信者たちを戒めています。「I コリ 3:3-6 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。ある人は「私はパウロにつく」と言い、別の人は「私はアポロに」と言っているのであれば、あなたがたは、ただの人ではありませんか。アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」このように、比較したり、評価したりすることは意味のないことです。主がすべてのことをしてくださるのでありますから。

2B キリストを証しする者 27-30

27 ヨハネは答えた。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることができません。28 『私はキリストではありません。むしろ、その方の前に私は遣わされたのです』と私が言ったことは、あなたがた自身が証ししてくれます。29 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。30 あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」

ここにある、ヨハネの言葉は一つ一つがとても大切なことを話しています。27 節、「天から与えられるのでなければ、何も受けることができません」は、「神の与えられることでなければ、何ごとでもない」ということです。ヨハネの弟子たちは、自分たちから人々が去っていくことに、何とかして歯止めをかけたいと願いましたが、そこには「人が何とかして、神の働きを制御する」という考えがあるからです。けれども、そんなことはできません。天から与えられるのでなければ、何も受け取ることができないのです。私たちも、何とかしようとしてしまいますね、本質的には神のすることです。

そして、28 節、自分がキリストではなく、キリストが来られる前に私を遣わした、と彼らがそれを見て、証言できるではないか？とっています。人は、誰かがはっきりと告知したのにもかかわらず、それでも妬みなどの感情に囚われると、そうした事実さえも無視したり、隠してしまいますね。

そして 29 節が、彼の思いを深く言い表した言葉です。イエスが花婿で、イエスについていく弟子たちが花嫁、そして自分自身は花婿の友人に喩えています。その時の思いは、花婿の友人が花

婿の声を聴くようなものであったということです。聖書において、イスラエルは数多く、主なる神の花嫁として喩えられていました。そして新約聖書では、教会がキリストの花嫁として喩えられています。

花婿の友人が、何を喜びにしているのでしょうか？ヨハネにとって、血縁のつながりもあり、かなり前からイエスを知っていました。そしてイエス様についての噂を多く聞くようになり、またバプテスマをイエスに授けました。自分のことが宣伝されることは、嫌です。彼を友人として愛するがゆえ、彼が表舞台で活躍すること、花婿が花嫁と結ばれることを何にもまして喜ばないでしょうか？結婚式の時に、主人公を出しおいて自分のことを前面に持ってきたないと毛頭思えません。ですから、ヨハネは、人々が自分をキリストではないか？と思われるほど人気があったけれども、その期待を敢えて自分のほうで冷却させてきました。イエス様を宣べ伝えている者が、イエス様よりも自分のことが注目の的になってきたら、不快感や拒否感、強い躊躇の思いが出てくるのが自然です。そしてイエス様の名が広められ、高められ、語られることを強い喜びとします。

そこで思い出すのが、ダビデの友人ヨナタンです。ダビデは、主がともにおられて、ペリシテ人と戦っても、いつも大勝利でした。主君サウルが妬みました。ダビデを殺そうとまですたのです。先ほど話した、主がなされている恵みを自分で制限しようとする愚かな試みです。ところが、自分自身のもものが取られることを知っておきながら、それでもダビデの友人になり、ダビデに尽くしたのが、サウルの息子ヨナタンです。ダビデに、自分の上着、よろいやかぶと、剣、弓、帯までも与えました。これはまさに、自分が父からの後継者であるにもかかわらず、ダビデが次期イスラエルの王になることを意味しています。自分の王位を彼に明け渡したのです。ヨナタンは、ダビデを友として自分自身のように愛していたので、彼が王になるという神の選びを知って、それに献身したのです。私たちが、主ご自身に対して、また仲間の主の働き人に対して抱くべき愛情です。

そして 30 節、「**あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません**」とヨハネは言っています。二つのことを言っていますね、高められるのは主ご自身で、低められるのは自分自身です。高められる主について見ていきましょう。ヨハネは、初めからイエス様が高められることを願っていました。主が近づいてこられた時に、「1:29 **見よ、世の罪を取り除く神の子羊。**」と言いました。「1:34 **この方が神の子であることを証しているのです。**」と言いました。彼はイエス様とその栄光に輝いているように、そのように語ったのです。周囲や弟子たちが、自分自身に注意を寄せている時に、ヨハネは忙しく、イエス様に目を向けさせました。

パウロが、ローマで投獄されている時に、手紙をピリピにいる信徒たちに書きました。パウロが牢獄されていることから、善意でますます熱心に福音を伝える人々がいる一方で、「ピリ 1:17 **ほかの人たちは党派心からキリストを宣べ伝えており、純粋な動機からではありません。鎖につながれている私たちをさらに苦しめるつもりなのです。**」とのことなのです。けれども、彼は気にしませんでした、「1:18 **しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方**

キリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます。そうです。これからも喜ぶでしょう。」これはすごいことですね、不純な動機で、パウロに対する妬みを抱いてやっているのですから、パウロが不利になっているのですが、それでも彼はキリストの名が宣べ伝えられていることを喜びとしていたのです。イエス様が盛んになることを喜ぶことです。

そして、衰えることではありますが、肉を誇るために割礼を受けていた者たちに対して、パウロはこう語りました。「ガラ 6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。」私たちが、自分が何かキリスト者として到達したかのように思っている、必ずキリストはご自分の愛のゆえに、私たちは、ただ神の憐れみのゆえに、罪赦された者にしかすぎないことを教えます。キリスト者の成長と言いますが、それは十字架からの成長ではありません。十字架にある神の愛、神の恵みがいかに広く、高く、深く、長いかを知る成長です。キリストを知り、キリストに知られ、この方を人格的に知っていく成長であります。

そして、自分が衰えるとは、イエス様が、ぶどうの木と枝の喩えを語られた時に、「ヨハ 15:5 わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」何もできないのです！何か自分のできることがないかと探している時、もちろん自分に与えられた賜物や財産を主に献げることは、いつもよいことです。けれども、献げる時に、自分がいかに無力なのか、神の恵みと憐れみなしには、自分には何一つできないのだということを悟らなければ、自分を盛んにすることはあっても、自分が衰えることはありません。ある時に、他の教会から来て間もなくの人が私に尋ねました。「何か奉仕をしましょうか？」ということです。ちょうど、私が何人かの人に「新しい信者の学び」をしたあとでした。私は、「いえいえ、それには及びません。すぐ目の前にいる教会の人々とまずは、交わってください。」とお願いしました。それから、その人は来なくなりました。後で聞いたら、非常に怒っていたそうです。どんなに正しい知識があっても、正しくイエスについて、聖書について語れても、自分自身に何かできると思っているものがあつたら、その人からキリストを見ることができなくなるのです。

3A 神の遣わした方 31-36

31 節からは、使徒ヨハネの注解になります。あるいは、バプテスマのヨハネが語り続けているかもしれませんが、バプテスマのヨハネの証言は終わり、キリストご自身が父なる神から遣わされた方として、神を証しされる方として現れている話をしていきます。

1B 天からの方 31-33

31 上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地のことを話す。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。32 この方は見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。33 その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押したのである。

バプテスマのヨハネをしてさえ、イエス様には到底及びもつかないことをここで語っています。イエス様は、「上から来られる方」です。地から出る者はどんなことをしても、地のことしか話せません。どんなにすばらしいことを話しても、絶対に地上のこと、人間のことしか話せません。天からでなければ、神のことを語れないのです。神の国に入るのもそうでしたね、ニコデモに対して、イエス様は、新しく生まれるのでなければ、言い換えれば、上から生まれるのでなければ、神の国に入ることはできないと言われました。そして、「すべてのものの上」と使徒ヨハネは強調しています。いわゆる地上の権威があるでしょう。また、空中における権威もあります。我々、現代社会に生きていますと、天空に権威や主権があることを忘れてしまいます。けれども当時は、霊についてのことはそのまま、ユダヤ人も異邦人も信じていました。パウロは言いました、「エペ 1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

そこでこの方が証しをされる時は特別です。あの偉大なモーセでさえ、神のお姿をそのまま見ることは許されませんでした。御子は、父なる神をそのまま見て、聞き、それをそのまま語られるのです。それゆえに、地に属する者たちはそのままでは、受け入れられないのです。パウロが言いました、「I コリ 2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。」しかし、「御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」と続きます。ここにあるように、「その証しを受け入れた者は、神が真実であると認める印を押ししたのである。」ということです。御霊によって、神が真実であるという確認をすることができます。確かにこの方は真理であると、まるで印鑑を押すかのように認めることができます。ここは御霊の領域なのです。

2B 御父に愛された方 34-36

34 神が遣わした方は、神のことばを語られる。神が御霊を限りなくお与えになるからである。

主イエスは、神の言葉を語られます。従来 of 預言者も、もちろん語っていました。神の御霊によって、語っていました。決して自分の思いや気持ちを語ったものではありません、そういった自分の心の思いを主の名によってかたるのは偽預言者であると断罪されています。しかし、そういった彼らにも、神の御霊のすべてを受けていたのではなく、預言を語るにふさわしい力を受けるといった意味で御霊を受けていました。しかし、イエス様においては、何の制限もありません。御霊が限りなく与えられています。主が、バプテスマを受けられた時に、御霊が鳩のように下っておられたところから始まり、主は、信じる者に聖霊によるバプテスマをお授けになります。

35 父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。36 御子を信じる者は永遠のいのちを持っているが、御子に聞き従わない者はいのちを見ることなく、神の怒りがその上にとど

まる。

イエス様が証言される時、父に遣わされた方として語られる時に、それは父と子の愛の関係から出ているということです。私たちは、世を神が愛されたことはよく聞きます。けれども、それは主体ではありません。父が子を愛しているというのが主体なのです。三位一体という教理を私たちは受け入れますが、父と子が一つなのは、愛における一致です。父がこよなく愛しておられ、御子にご自分のすべてを与えられ、御子は御父の言われたことをそのまま語り、行われることをそのまま行われ、それ以外のことはなさいません。なぜなら父を愛しているからです。父に愛され、父を愛し敬っているから、一つになっています。

そこで、永遠のいのち、神にある命というのは、御子のうちにすべて隠されているのです。「コロ 3:3 あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。」ゆえに、単に神を信じる、ではなくて、御子を信じる者が命を得て、信じない者は命を見ません。ここではっきりと、「神の怒りがその上にとどまる」とあります。前回の学びで、ヨハネ 3章 16節で、永遠の命とは今、持っているものでり、裁きも、これからの裁きもあるけれども、命につながっておらず、暗闇を愛していることそのものが神の裁きだということを見ました。御怒りが、すでに留まっているのです。そして将来、その御怒りが見える形で現れ、神の前で罰せられます。

このようにして、私たちはバプテスマのヨハネの証しから、自分たちが衰える中で、イエス様が盛んになる証言を見ました。人と人の比較や、評価というのは肉に属しているものであり、まったく、地上に属するものです。神の証しはあくまでも、天から来るものです。